

第十一集

# 山川町の文化財

— 山川町文化財少年団の活動 —

鹿児島県揖宿郡山川町新生町八十四番地

山川町教育委員会



## 発刊にあたつて

山川町教育委員会

教育長 米倉定男

この「山川の文化財」第十一集は、昭和六十一年度から始まつた文化財少年団活動を集約したものであります。

文化財少年団は二つの目的をもつています。

一つは、地域の文化財について、子ども達自らが調べ、考え、伝承する活動を通して、郷土を正しく理解すること。二つは、幅広い視野をもつて、未来のふるさとづくりに寄与しうる青少年を育成すること。

こうした目的を達成するため、子ども会・PTA・地域の方々・学校関係者に多大なご協力をいただきました。

本当にありがとうございました。今後とも、児童生徒が、「過去との対話」を通して力強い青少年に成長していくよう見守つていただきたいと存じます。

町民各位におかれましては、この資料集を十分に活用され、山川町發展のための精神的糧にしていただければ幸いです。

平成六年二月二十八日



旧正龍寺跡地での作業



## △ 目 次 △

(一)、発刊にあたって	1
(二)、昭和六十一年度・六十二年度 福元区岩下文化財少年団 「福元の史跡と伝承を語りつごう」	4 12
(三)、昭和六十三年度 利永区文化財少年団 「琉球人傘踊りの保存・伝承」	13 18
(四)、平成元年度 徳光小文化財少年団 「郷土芸能 「棒踊りの伝承」」	19 23
(五)、平成二年度 大成小文化財少年団 「『棒おどり』の継承活動とふるさとづくり」	24 28
(六)、平成三年度 山川小文化財少年団 「山川石と私たちの生活のかかわり」	29 35
(七)、平成四年度成川区神方文化財少年団 「伝統芸能 「剣舞」の伝承活動」	36 41
(八)、平成五年度 利永区東下文化財少年団 「利永の文化財の保護とその伝承」	47 42
(九)、編集後記	

テーマ 「福元の史跡と伝承を語りつごう」

少年団の構成 小学生一八名 中学生九名 計二七名

山川小学校一年 木下寿浩 木下明子

二年 上野友和 今村圭志

三年 池水みゆき 浜田亜美

四年 桜井隆弘 松林公美（老人クラブ会長）

五年 木下貴之 下尚美（山川小学校教諭）

六年 木下義文 内蘭裕子（社会教育文化係長）

木下秀一 岩下尚明（山川町教育委員会）

木下幸人 原田龍彦

木下有里 上野武信

木下義文 上野長彦

木下秀一 岩下尚美

木下義文 岩下尚美

木下義文 岩下尚美

木下義文 岩下尚美

指導者

松浜福里公美（老人クラブ会長）  
下田裕子（山川小学校教諭）  
尚明（山川町教育委員会）  
社会教育文化係長

## 活動要旨

### 一、実施期間

昭和六十一年四月十九日～昭和六十三年三月二十日

### 二、はじめに

私達が住んでいる岩下集落は、山川港の山手側に位置する福元区内の小さな集落である。戸数は七十三戸、

人口は二百五十一人、PTAは十二戸、職業は多種多样である。

ここに、十六年前から子ども会が発足し、年々、活発になっている。地域の人々は、子どもがいる、ないにかかわらず、「子どもは地城の宝だよ」といつて、私達の子ども会活動を陰から支えて下さっている。

したがって、この間、活動が下火になることもなく、明るく楽しい気分でづけられてきた。昭和五十五年度に、県の優良少年少女団体として表彰をうけることが出来たのも、こうした実績が認められたのである。さて、この子ども会活動の中で、私達は、地域の伝統行事に取り組んでいた。特に毎年十一月になると、亥の日の行事である「サイヨ・サイヨ突ツ」というものをする。これは、古くから地域に伝わっていたものを、昭和五十一年度にはじめて子ども会に取り入れた。

れて復活したものである。この行事を通して、私達は、自分たちの「ふるさと」への関心を深めることができた。

本年度は、文化財少年団事業を取り入れて、この「ふるさと行事」への取り組みを、さらに充実したいと考えている。

### 三、実践活動の概要

#### (一) 計画作成

四月十九日、「青少年育成の日」である。この日を期して、山川町では、町内すべて「小中学生ぐるみの子ども会」を発足させることになった。

しかし、ここ岩下集落では、以前から小中学生の組織化がすすんでいたので、さっそく、役員の選出・年間



少年団の面々

と伝承を語りつづこう」となった。

(二) 招魂塚学習会と石碑建立会

ア

五月五日「子どもの日」に、招魂塚の前で、町教育委員会の松下係長より、「西郷隆盛・西南の役そして山川」という話を聞いた。

この中で、

(ア) 西郷さんは、山川町にたびたびこられた。山

川港や鰐温泉に。

(イ) 西郷さんを尊敬する人々が、山川町に幾人もいた。特に、西郷さんという人は、心がきれい

で、瞳がダイヤのよう輝いていた。

(ウ) 「西南の役」という戦争が始まつた時は、山川町からも若い青年が、西郷さんを助けるため

に多く参加していった。

(エ) しかし、時の政府軍についた人もいて、山川町はまつぶたつに分かれて、政治的対立が激しかつたこと等を学んだ。

さらに、

(オ) 西郷さんの側についた人々のうち一七名が熊本県の田原坂等で死亡し、その中には一七才の人もいた。

(ガ) ここにある招魂塚は、この西南の役で亡くな

った人々の魂を、ここ山川のふるさとに招き、しづめるためにつくられたものであることを等を

学んだ。

イ、石碑建立会

この日にはまた、「石碑建立会」もおこなわれた。これは、昭和五十五年度に県の表彰を受けたことを記念して、招魂塚に桜九本を植え、毎年、年三回、子ども会で美化活動をしてきたが、今回、山川石で永久的な石碑を建立することになったものである。

これには、経費が二十八万円かかったが、この募金及び据えつけには育成会があたつた。  
二時から神事・玉串奉典・除幕と続いたが、除幕には、小中学生は勿論、卒業生の高校生もあたつた。



招魂塚での学習会の風景



記念碑と子どもたち

この碑には、「心身をたくましく郷土を美しく」と記されている。これは、西南の役で亡くなつた人々の気持ちを継いで、子ども会員が山坂達者で地域奉仕できる立派な人になろうと誓つたものである。

## (二) 旧正龍寺跡古石塔調査

九月二十日、青少年育成の日に、旧正龍寺跡を訪ねた。これは、岩下集落にあるものだが、これまで子ども会では、これといって特別な関心はなかつた。

しかし、どうも有名な寺であるらしい。そこで、町教育委員会の松下係長を招いて、話を聞き、古石塔の調査をおこなつた。

その結果、正龍寺は、

ア 明徳元年（一二九〇）に虎森という京都からやつ

てきた偉いお坊さんが開いたものである。

イ 山川港には、戦国時代、外国船が多く入港しており、正龍寺は、その船との文書の授受をやっていた。これは、今でいえば、外務省の仕事、あるいは、出入国管理事務所の様な仕事であったらしい。

ウ 外国とのつきあいが深かったことから、この寺には、外国の新しい文化が入っていた。特に、中国の学問は、全国に先駆けて、この山川の正龍寺に入っていた。したがって、多くの学者が山川にやってきては、勉強をつんで、京都に帰っていました。いまでいえば、大学の役割を果していたのである。

エ しかし、明治になつて、廃仏毀しゃくという運動が起り、この寺もその時に徹底的にうち壊された。当時、寺に關係していた人々は、それを残念に思い、正龍寺の歴史を長く語りつぐことになつたという。オ 山川の人々が、昔から勉強にとても熱心だったのは、正龍寺の伝統のためであろう。

カ 古石塔を調査して驚いたことに、寺域内には、多くの坊さんの墓石が残つており、その中には、「京都で死亡」と記されているものもあった。この寺は、さすがに、当時の中央とも密接な関連があつたのである。

キ 寺域内には、

大きな鬼瓦も残されていた。大

人一人で、やつと持ちきれるほどのものであつた。これによつても、この寺が、いかに大きな建物だつたかがしのばれた。

#### 四 山川薬園跡学習会と美化作業



古石塔調査の風景

(7) このリュウガンの樹を中心とした一帯には、薩摩藩

十月十七日「青少年育成の日」に、山川薬園跡地で町教育委員会の松下係長より、「山川薬園跡及びリュウガン」について、話を聞き、除草作業をおこなつた。

学習の中で学んだことは、

(1) 当時は、山川の島津薬園とよばれ、レイシ、ハズ、キコク、カンラン、リュウガンなどの薬草木が数多く

植えてあつた。

(4) このリュウガンは、熱帯に生育するムクロジ科の一  
種で、樹齢二〇〇年以上と推定されている。

(5) この樹は今年も直徑一、五cm程の茶褐色の甘い実を

いっぱいつけたが、明治の終り頃までは、東京にあつた島津邸へも献上されていたと伝えられている。

(6) 山川薬園跡及び

リュウガンは、昭

和二十九年三月二

十二日、県指定史  
跡、天然記念物に  
指定された。

(7) 薬園の「史跡」

と、「天然記念物」

としての意義をあ  
わせもつ大切な文  
化財である。

(8) 今年、みのつたりュウガンの実による実生づくりの  
苗木（町教育委員会新村課長の育苗）を見せてもらつ  
て、リュウガンは実生づくりのできることがわかり感  
銘した。

(9) 学習後、薬園跡一帯の除草と、リュウガンの実生床  
づくりをした。

十一月二十一日、「青少年育成の日」に、育成者宅で亥  
の日の由来学習と、亥の日のもちつき行  
事をおこなった。

ア 亥の日の由来学  
習

岩下子ども会指  
導者の福里公美さ  
んより「亥の日の  
由来や行事につい  
て」の話を聞いた。  
この中で学んだ  
ことは

実生づくりのリュウガンの苗木



(10) 春の亥の日に「亥の子」の神が田に降り、十月の  
わる行事で、旧暦の十月の第一か第二の亥の日が選  
ばれる。岩下集落では、毎年、第一の亥の日を選ん  
でいる。

(11) この行事は、  
昔から山川に伝

(ウ) 亥の日に仕事を終つて家に帰つて来るという。

(ウ) 亥の日の神は「サツの神」といつているが、多分「作の神」で農作物の神という意味らしい。

(エ) 亥の日の餅は、「作の神」にあげるためのものである。だから福元区全集落の人が

餅をついている。

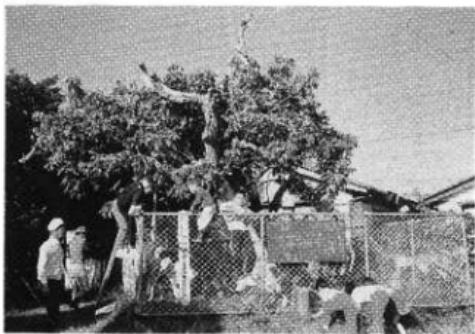
(オ) その年にとれた新米・新穀で餅を作るが、岩下

集落では、新米で普通の餅の三個分ぐらいの紅白の餅をつくり、

五穀豊饒を祝つて神に供える。

(カ) 山川の福元区には、亥の日の行事として、「サイヨ、サイヨ突ツ」という行事があるが、これは、日本では、一般に亥の子突きという石突行事である。

(キ) 岩下集落では、例年、子ども会の餅つきが終つた



菜園跡地一帯の除草作業

あと、五輪塔の最上段の墓石に六～八本のつなをつけ、歌声に合わせて、集落の四つ路をついて回る。

集落を一周したあと、老人から昔話を聞いている。

(ク) この時、唄う歌は、「サイヨ、サイヨ、今夜の亥の日には、餅やつつがなんど。シトメガネ、シトメガネ」。シトメとは白米のことである。

(ケ) この行事から、「子どもがすこやかに育つてくれるよう」という願いを感じることができる。

#### イ 亥の日の行事

(ア) 午後二時三十分、子ども会育成会長の桜井さんで全員集合する。

(イ) 桜井さんより、経過報告と日程説明を聞く。

(ウ) 岩林さんより、「文化財少年団活動について」の話を聞く。

(エ) 福里公美さんより、「亥の日の由来や行事について」の話を聞く。

(オ) 餅つきをする。

はじめに、指導者、育成者の方々がつき始めをし、キネの使い方や、手まぜの仕方を指導してくださる。

中学生は餅つきをし、小学生は餅まるめをする。

「サイヨ、サイヨ突ツ」始めの式が行なわれる。

(キ) 午後六時から、暗闇の中を「サイヨ、サイヨ……」

と歌いながら、集落内四つ路九個所をついてまわり、  
紅白餅をもらつて帰る。



「亥の日の由来」学習風景



餅つきの手ほどきをうける中学生



餅つき準備風景



小学生の餅まるめ、餅づくり風景



餅つき風景



石突道具作り、縄かけ作業

#### 四、まとめと今後の課題

さる努力によつて生み育てられた貴重な財産である。



歌に合わせて元気よく石突き

以上、年間計画にもりこまれているものを中心に活動してきましたが、これからは、「地頭飯屋跡石塀について」の学習会や、「昔話を聞く会」などの行事が予定されている。

文化財は、祖先のたくましい創造力、たゆま



「サイヨ、サイヨ突ッ」の集落回り



「サイヨ、サイヨ突ッ」の歌い始め

私たちは、これらの文化財を損傷したり破壊することなく完全な姿で、いつまでも伝えていく責任を負っている。したがつて微々たるものかもしれないが、岩下子ども会として、文化財少年団として、毎年数回文化財指定地周辺の美化活動を計画し、実施してきているところである。子ども会員は、この活動を通して、「わがふるさと山川」の歴史に一層の関心を深めていける。

このような考え方や活動が、岩下集落でなく福元区全体、そして、山川町全体にひろまり、町内の民話や文化財が堀りおこされ、それらが子ども会の力で保存していくければと願っている。

昭和六十三年度

利永区文化財少年団

## テーマ「琉球人傘踊りの保存・伝承」

少年団の構成 小学生 二五名

利永小学校六年

市井手信也 久保直人 久保辰也 久保一

市井手信也 久保直人 久保辰也 久保一

指導者 西元正行（利永区公民館長・

射場山 岩松 松山保徳（自営業）  
前畠義治（会社員） 会長

琉球人傘踊り保存会員全員

南前西坂久市南福西井市池端久行  
方田侯元保山吉村手市山久保山市  
いづみ和美久百合真知江敬太信市山大  
前樋渡馬下山烟田迫西市山将  
さゆり広子由紀子湯香里智彦純啓洋  
西和田中芳志農夫川迫次  
里正和田中志農夫川迫次  
志正和田中志農夫川迫次  
西迫豊秀正清文辰文男文  
博一

その他、琉球人傘踊り保存会員全員  
西元正行（利永区公民館長・  
射場山 岩松 松山保徳（自営業）  
前畠義治（会社員） 会長  
琉球人傘踊り保存会員全員

## 活動要旨

### 一、実施期間

昭和六十三年四月一日～平成元年二月三十一日

### 二、はじめに

当地区は、山川町の最西部に位置する七集落からなる利永区と、山ひとつ隔てて池田湖畔東部に位置する一集落からなる尾下区とから構成されている。総面積五・一九km<sup>2</sup>、人口約一六〇〇人、南西部眼前に開聞岳の雄姿を望む、風光明媚にして気候温暖な、緑に囲まれた純農村地帯である。

本来、専業農家が多く、そ菜・花き・たばこ等、年間を通して換金作物の栽培が行われ、生来の篤農ともあいまつて経済状態は良好である。また、外國航路の船員の多いことも特徴の一つであったが、近年の海運業界の不況から離職帰郷者の増加が著しい。なお、婦人のパート就職も一般的となつてきている。

教育には極めて熱心で、PTAの会合はもちろん、町連や町子連などの諸会合にも積極的に出席している。

学校で行う行事には、毎回ほぼ一〇〇%の出席率である。

### (一) 活動のねらい

当地区には、「メンドン」(悪魔払い) や「ダセチツ」(子

宝祈願)など、伝統的な行事が昔から伝えられている。

中でも、「琉球人傘踊り」の郷土芸能は、とくに保存会を結成してその保存・伝承に努め、活動の過程で連帯感の醸成と子供達のふるさと意識の高揚をめざし、豊かなむらづくり推進の一環に位置づけているところである。

ア 郷土行事や郷土芸能の継承・保存につとめる。

イ 繙承活動を「明るく思いやりのある人間性豊かな村づくり」の一環として位置づける。

ウ 子供達に伝承する中で、郷土に対する愛着心を育てる。

(ア) 踊りの由来や歴史的背景をわからせる。

(イ) 郷土芸能に関心を持たせ、大事に守り育てようという気持ちを育てる。

(ウ) 活動の過程を通して対話の輪を広げる。

□ 琉球人傘踊りの由来等

利永琉球人傘踊りは、江戸時代、薩摩藩の琉球支配という歴史的状況の中で生まれた民俗芸能である。

一六〇九年以降、琉球王は島津氏に使節団を送るようになつた。当時、山川港に入港した一行は、利永地区を経由して、航海安全の守護神として人々の崇敬を集め、いた薩摩一の宮・枚聞神社(開聞町十町)にしばしば参詣して舞踊を奉納した。利永地区の人々が、これらの使節団の踊りをまねて作りあげたものがこの踊りの起

りと伝えられている。

踊りは、薩摩への使者達が、生きて再び琉球へ帰れるかと心配し、涙ながらに決死の覚悟で船出したときの様子や、道中の次第を表現しているといわれる「傘踊り」と、無事に大役を果たした使者達の安堵の気持ちを表現している「かれよし踊り」の二つからなっている。

踊り子は、小太鼓三人、番傘三人、鉦三人、その他笛多数からなり、全員が脚絆に白足袋・わらじ履きで、青・赤・黄に染め抜かれた前掛けをし、紺の着物には赤と黄の二本の帯を腰の横に結んで垂らす。頭には青の鉢巻きを締めて後ろへ垂らすという華やかないでたちで、歌に合わせて緩やかに踊る。

戦後一時期途絶えていたが、昭和五十二年利永小学校の創立百周年のとき、精米業・松山保徳氏によって三十年ぶりに復活した。その後、保存会を結成し、地区の行事等で踊られてきた。

ところが、当地区でも過疎化が進み、青年層が少なくなり、この踊りの伝承が困難となつたため、数年前から小学六年生が踊りを継承することになり現在に至っている。毎年十月十日に行われる利永・尾下区民体育大会がその晴れ舞台である。

### 三、実践活動の概要

毎年九月末から十月初めの十日間、午後七時から九時まで、利永小学校体育館で、六年生全員と学級担任が、保存会員の指導で練習する。

傘持ち、扇子、太鼓、鉦、笛に分かれて練習するさまは、教える側も、教えられる児童も、共に真剣そのもので、踊りを仕上げる喜びを通して、さわやかな心の交流の場となつていて。

また、父母の応援もさかんで、親子のふれあいの場としても価値あるものとなつていて。

#### ア 活動の日程

(ア) 九月二十日、授業実施（創意活動）  
テーマ「琉球人傘踊りを調べよう」

#### ○主な学習活動

- 前年度のVTRを視聴する。
- 調べたことを発表する。
- 保存会の人の話を聞く。（録音）

児童に踊りの歴史的背景や伝承のようす等を知らせ、郷土芸能に対する認識や関心、さらには継承への意欲づくりをした。

なお、給食指導の時間に数日間、前年度のVTRを視聴させ、踊りの様子と歌への慣れを図った。

(4) 九月二十七日、打ち合わせ

- 利永公民館において、夜、保存会員及び学校関係者による練習日程等の打ち合わせ会をした。

練習日数八日間、夜七時半から九時まで、小学

- 校体育館で実施を決定 踊り子総勢三十名とした。

(5) 九月二十九日

練習開始

- 役割分担、行列の位置の決定

- 歌の練習並びに模範演技

- 初日ではあつた

- が、「傘踊り」の型をほぼ半分近く

- 指導。VTR視聴

- の効果か覚え方が

速く幸先よい出発となつた。

本年度の踊り手は児童二十六名、担任教師一名、

青年三名、計三十名であつた。

初日とあって、保存会員も多数参加し、活気にあ

ふれた。

(2) 九月三十日及び十月三日～八日

- 小学校運動会が十月一日のため、二日間は練習を中止した。

- 三日目には「かれよし踊り」の練習に入るなど子供達の練習にかける意気込みと、指導する保存会員の熱意とが、見守る者の胸をうつ。

年とともに、子供達の習得率が上がってきているようである。

- 五日目からは、二種の踊りの総合練習を開始、仕上げに

- 一步々々近づいている様子が目を追つて見る者にも分かる。

- 練習最終日の八日は、保存会員はもちろん、子供達の



利永文化財少年団員



利永小運動会で披露

保護者も全員出て、衣装合わせ並びに化粧の手順や方法について予行実施。当日の忙しい準備に保護者のとまどいをなくする方策を講じた。

(才) 十月九日、公開披露

・二十二日、さつまいもフェスティバル会場の特設舞台で、町内外から訪れた数百人の観衆を前に堂々の演技を披露し、絶賛を得た。

四、まとめと今後の課題

郷土芸能を調べ、体験することにより、子供達に故郷への愛着心が育つべきである。

現在、踊りの指導が保存会員でなされているが、今後、中学生や高校生が参加してくれたら、異年令集団の交流の中で、より充実した、むらおこしにつながる活動がなされるのではないかと期待している。

五、指導者の所見

子供達が、保存会員の指導に対して素直に応えてくれており、質的にも期待するところまで高まっていることは、伝承と振興を目的として活動している保存会にとって大きな力であり、感謝にたえない。今後共ますます振興に励みたい。



各種イベントで公開披露

(才) さつまいもフェスティバル会場にて踊りの披露

・町より要請があり、十月二十三日に公開演技することとなつた。

・二十日から二日間、練習を行う。

## 六、活動の成果

### (一)、児童の変容

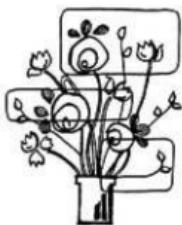
ア 踊りが楽しい。

イ 今後ずっと続けたい。伝えたい。

踊りの由来や歴史、あるいは復活にかけた人々の努力を知るに及んで、子供達の心に強い感動をよび起こし、伝承の主体に自分を置こうとさえする心情の高まりを見せる者もある。生きた郷土教材としての価値は、すごぶる高い。

### (二)、利永むらづくり運動への寄与

戦前、利永では踊れない人はいないうらいで、祝事には必ず踊られていた程のものが、三十年近く中断の後復活。子供達の手によつて伝承・振興が図られつつあることは地区の人々にとって大きな喜びであり、力強さを感じさせている。このことが、むらづくり運動にとっても、ひとつの大好きな励みになつてゐるであろうことは否めない。心に届く教育の貴重な場のひとつである。



## テーマ 「郷土芸能 棒おどりの伝承」

少年団の構成 小学生 七九名

徳光小学校四年

上井 智広・川畠 忠久・西原 尚文

鎌田 健一・西村 崇・西村 新一

菱川 文智・馬場 尚法・馬場 健一

前田 忍・濱田 直哉・野元 聰一

山元 聖明・内田 美琵・兒島まき子

白濱恵梨子・前田 修子・前田 直子

馬場美穂子・宮田瑠理子・濱田 美保

高崎麻衣子

川畠 友和・下田 寛子・大口 喜久

尾立真奈美・下田 哲也・田村 香

中村 晓・西原 朋子・村口 大輔

七夕 札子・林 栄作・西田 智美

浜田 直樹・林 真子・浜田 昭人

濱田みづえ・浜田 博和・春 由紀子

濱田健太郎・濱島しおり・東 健悟

浜島美由紀・永田 範章・前瀬 沙織

六年 上村 匡史・白濱 光師・田中 奈美

正哉・白濱 政一・馬場二すえ

坂元 一貴・馬場 良仁・西元由美子

坂元 仁・西村 舞・濱田 有香

鎌田 嗣海・前田 昭市・永田 理奈

木下 勇喜・前田 修文・前瀬 千鶴

田中 喜己・前田 剛宏・宮田 紗織

永田 孝一・矢越 良一・宮田 美紀

永田 慎司・宮田 真人・宮田 純子

永田 旭・高崎 一・浜田 慎二

### 指導者

野 口 藤兵衛(徳光小学校長)

荒 田 和泉(徳光小教諭)

藤 田 茂(徳光小教諭)

黒瀬 徳美(徳光小教諭)

浜 田 政三(会社員)

浜 田 吉藏(農業)

## 一、実施期間

平成元年四月一日～平成二年三月三十日

## 二、はじめに

わたしたちの学校は山川町の西に位置して、とても景色のよい景勝地の所です。一面に畑が広がっており、畑には農家の人がハウス栽培や野菜づくりに精を出しており、特にすいかの栽培はさかんで「徳光すいか」の名前で有名です。

また、地域には色々な伝統行事があり、その中で新聞などによくるものとして、浜兎ヶ水地区の「さんこんめ」という行事があります。この行事は、一月七日に行われるもので、もうそろ竹の中に、集めたお金をいっぱい入れて、子供の人や大人の人が路地の所でたたいて回り、そのうちに竹が割れてお金が少しずつ出てくるのを捨うという行事です。今年一年病気にならないで健康で過ごせるようにと、祈つて行つたといわれています。

私たちが練習している伝統芸能は「棒おどり」です。

棒おどりは昔若い青年の人たちが練習しておどつてい

## (一) 取り組んでいる様子

学校の創意の時間（光の時間）に練習をしています。練習は四年以上六年生までしているので、四年生にな



バッチョがさ姿で竹筒を振り回す「さんこんめ」

&gt;山川町浜兎ヶ水&lt;

モウソウ 竹に腰貸 地面にたたきつけ

つてはじめのときは、五・六年の練習を見たりテープを聞いて歌の様子を知ります。その後少しづつ練習していきます。

できるようになるととてもうれしいですが、六人で力を合わせてしないとならないので、チームワークが大切になります。また、おどりは、竹をもつてするので、けがをしたり悪ふざけしたりしないように、先生から特に注意されますが、ぼくたちは竹をもつて練習するときは、真けんになつてするので、けがをすることはありません。その外練習のとき棒おどりについて、お年寄りの方から話を聞いたり歌を聞いたりしていくまです。(どうして棒おどりをするようになったのか、やり方は、どうするのかなどについて)歌を聞いても、あまりよくわかりませんが、歌がとても上手で、どうして声があんなにできるのかなあと感心します。

練習したものを運動会でするときは、とてもきちんとします。タスキをかけ、棒をもち、堂々と入場し、おどりをしますが、ときたま、まちがつて棒が体にあたることもあります。そんな時は痛いと思い、みんなにめいわくをかけたなと思います。すんだあとはすがすがしくなりうれしいです。

集落の運動会では、中学生も参加しますので、にぎ

やかになります。中学生が入ると、おどりが大きくなりえ、いさましくなるようです。

見ている大人の人も、「大きくなつたね。とても上手になつていて」といつてほめてくれます。そんなのを聞くと、とてもうれしいです。これからも練習して続けていきたいと思います。

### (二) 練習が十分できない

一週間に一時間の練習があるので、おぼえようと思つても忘れたりするので、はじめのうちは、おぼえられず苦労します。特にはじめてならう四年生は大変だと思います。それで一週間に一時間くらいあればもつと上手になれるのではないかと思います。それと、時間ががあれば歌もおぼえたいと思いますが、歌は全然練習できません。できれば、おじいさんに来てもらつて教えてもらえば、またおどりの方も、うまくなると思います。

### 三、実践活動の概要

四月二十日、四年生以上の児童が棒おどりについてのお話を聞く。

四月二十二日 棒おどりの由来についてお話を聞く  
五月十日 六年生の棒おどりの見学と練習

五月十七日

#### 棒おどりの練習

六月七日

#### 棒おどりの練習

六月二十八日

#### 棒おどりの練習

七月五日

#### 棒おどりの練習

七月十一日

#### 棒おどりの練習

九月六日

#### 棒おどりの練習

九月十四日

#### 棒おどりの練習



町「青少年育成の日」推進大会で発表

#### 四、まとめと今後の課題

校区にうけつがれている伝統芸能を育てるために、わたしたちは先生の教えをよく聞き、練習にはげんいかなければならぬが、問題となる点も多いです。

(一) 学校だけではなく、地区の小学生、中学生、高校生、青年団などが中心になつて取り組めば、さらによくなるのではないかと思います。

(二) 学校の先生におしえてもらつていて、せいかくな棒おどりができないので、お年寄りにきてもらつて教えてもらつています。

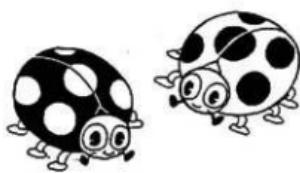
いくのだということをねがつてすすめているので、せいいっぽい努力しています。

#### 五、指導者の所見

郷土のよき伝統芸能を伝承することによって、児童が

郷土に愛着をもち、こんなすばらしい芸能があつたのかという自信とほこりを持たせ、思いやりの心を育てていきたい。また四年から六年まで教えるので、上下関係によるよい意味の態度が芽ばえてきつつあるので、さらに古老などのお話を指導を受けながら推進していきたい。願わくば、このような伝統芸能を、今後、学校だけでなく、

各地区（浜見ヶ水は取り組んでいるが）で、小学生、中学生、高校生、青年団などで構成し練習を積んで守ってくれば、もっと青少年の健全な育成が図られるのではないかと思う。



## テーマ 「『棒おどり』の継承活動とふるさとづくり」

少年団の構成 小学生八二名 大成小学校三年

今村 哲治・大保 彰弘・上蘭 圭悟・桑鶴 正幸	西元 久登・馬場 一昭・福留 晋也・桃木 真二	山口 一・間藤 智美・有馬 理沙・今村 美香	上田 いづか・内村 あゆ美・上村 朋美・黒木 歩	小玉 郁美・紺屋 愛弓・津島 陽子・西元 香織	原口 早紀子・林 涼子・外蘭 裕子・松下 佳代	内村 守・大蘭 将士・木下 恵吾・鶴蘭 智久	中島 健二・永田 賢作・西 真輝・西牟田 司	馬場 智久・東 大陽・福留 輝久・福村 裕樹	松元 渉・上釜 寿子・打越さやか・新留みさき	田之畑 愛・中村加奈美・永田 希・永田 典子	堀内 洋美・堀之内直子・前蘭あづさ・松下 尚代	三島 由利・吉村 智代・吉元 志保・岩崎 章郎	内蘭 庄太・大蘭 正太・上蘭龍之進・新留 和己	水流 功伸・中島 拓哉・東 周介・福里 和英	福元 大・外蘭 友大・宮武 知也・矢崎 二天
-------------------------	-------------------------	------------------------	--------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------	------------------------

### 指導者

内蘭 秀雄（大山棒おどり保存会会長）	打越はるな・内蘭 瞳・大蘭ふみ代・神蘭 里奈
前村 治（大山棒おどり保存会会員代表）	大门 美栄・寺村奈津希・濱田 麻子・東 加奈
新留 幸一（子ども会育成連絡会代表）	東 由美子・福崎 友紀・丸山 佳織・宮蘭 詩織
松元 龍一郎（子ども会育成連絡会代表）	山口 和美・吉村 美香

## 活動要旨

### 一、実施期間

平成二年四月一日～平成三年三月三十日

### 二、はじめに

「ハイヤノヒイヤサ!」「エイヤノサッササッサ」

夜の闇を裂くような元気な氣合いが、大山公民館の庭にひびきわたりました。郷土芸能「大山棒おどり」が昭和四十九年、二十五年ぶりに復活され、その練習が今もつづいているのです。

踊りのしぐさには、棒で地面をたたく動作が多いです。

これは、眠っている地の神様をおこして、豊作をお願いするのだそうです。

昔は、若い青年の人たちがたくさんいて、おどっていたそうですが、今は、おどる人もだんだんすくなくなっています。「大山棒おどり保存会」のおじさん達がすたれていかないようにいっしょにけんめいがんばっています。(山川町教育委員会松下尚明係長の「大山棒おどりの由来」のお話の中から)

わたし達も、この大事な郷土芸能をまもつていこうと、一年間、「棒おどり保存会」のおじさん達から教えてもらつて、いっしょにけんめい練習し、おどりました。

これからも絶えることがないよう、もつともつと練習し、がんばっていきたいと思います。次に取り組んできたことをまとめてみます。

### (一) 平成二年度実践活動計画

ア、四月二十八日 年間活動計画についての話し合い

イ、五月二十五日 年間活動計画についての話し合い

ウ、六月二十三日 年間活動計画についての検討会

エ、七月二十五日～八月六日

オ、八月四日 「棒おどり保存会」と合同練習

カ、八月八日 「かごしまの味ふるさと列車」歓迎

キ、八月十一日 レセプションにおいての披露

サ、八月二十日～二十七日 大山地区六月灯での奉納及び披露

露、十月一日～五日 おどり棒切り出し作業

ケ、十月一日～五日 繙承活動

コ、十月七日 大成小大運動会での披露

サ、十月二十一日 山川さつまいもフェスティバルで披露

シ、十月二十七日 町内老人ホーム慰問  
ス、二月二十五日～三月一日 棒おどりの練習

セ、三月三日 「山川町花と緑のフェスティバル」での披露

### ソ、三月二十三日、実践活動反省会

#### 三、実践活動の方法及び成果の概要

年間実践活動計画にしたがつて、活動を続けてきましたが、その方法やよかつたこと等をまとめてみます。

(一) 四月二十八日と五月二十五日の年間計画についての話し合いは、子ども会育成会の方々や大山棒おどり保存会の方々といつしょに、期日のことや練習時間のことなどくわしく話し合いました。

(二) 七月二十五日から八月六日までは、「かしまの味ふるさと列車」歓迎セレブションと大山区六月灯での披露に向けて、大山集落センターで練習しました。

(三) 八月四日は、「かしまの味ふるさと列車」で、約八十名のお客様がお見えになりました。長崎鼻町営駐車場跡地での歓迎セレブションにおいて、棒おどりを披露しました。とても喜ばれました。

(四) 八月八日は、大山区の六月灯が大山神社境内であります。棒おどりの奉納と地区の皆さんたちへの披露をしました。

(五) 八月十一日は、わたし達の使うおどり棒を切り出すために、大山棒おどり保存会のおじさん達といつしょに鷲尾岳に登り、一人一本づつ切り出しました。そして、安全で使いやすいようにけずつたりしました。

(六) 八月二十日から八月二十七日の棒おどり練習は、わたし達が正しくおどれるように、大山棒おどり保存会の方々が指導してくださいました。子ども達への継承活動は今年で二年目です。昨年は、掛け声に合わせておどるだけのおどりでしたが、今年は、歌に合わせておどる練習することになりました。午前七時三〇分から八時三〇分まで大成小学校の体育館とグランドで、グループ毎の練習をしました。

(七) 十月一日から十月五日までの棒おどりの練習は、夜の八時から九時まで大成小学校の体育館でしました。夜なので、お父さんやお母さん達も全員参加しました。

(八) 十月七日は、大成小学校の大運動会でした。わたし達は、せいいっぱいのおどりを披露し、たくさんの拍手をいただきました。

(九) 十月二十一日は、長崎鼻で「山川町さつまいもフェスティバル」が開催されました。町内外からたくさんのお客様がお見えになりました。わたし達もステージ前の広場で棒おどりを披露しました。

(十) 十月二十七日は、町内にある老人ホーム「徳光苑」を慰問しました。棒おどりの披露やレクリエーション等、楽しい一日を過ごしました。徳光苑の皆さんがとても喜んでくださったのでうれしいでした。

#### 四、まとめと今後の課題

けてがんばります。

(一) 郷土にうけつがれている棒おどりを育てるために、わたし達は棒おどり保存会のおじさん達の教えをよく聞き、練習に励んだこと、多くの人達の前で披露できることはたいへんよかったです。

(二) 少年団員八二名全員がすべての行事に参加できたことは、みんなえらいと思います。平成二年度おわりの行事「山川町花と緑のフェスティバル」での成功に向けてがんばります。

(三) 人の前で棒を持ちおどるので始めのころは恥かしがつていたが、だんだん慣れて自分から進んでやるようになつたことは、とてもうれしいことです。

(四) グループ活動が多かつたので、仲よく協力していくことの大しさがわかりました。



さつまいもフェスティバル



さつまいもフェスティバルでの棒おどり披露



徳光苑入園者とのふれあい

(内) みんなが力を  
合わせて行事を  
成功させようと  
がんばったこと  
は、とてもいい

勉強になります  
た。

(七) これからもが  
んばっていきた  
いと思いますが、  
大事に受けつい  
でいくためには、

小学生、中学生、  
高校生、青年団

員が中心になって取り組んでいけば、もっとよくなる  
のではないかと思いました。

### 五、指導者の所見

子ども達には、郷土芸能の目的が着実に浸透していく  
ようで、精いっぱい受けつごうとする姿が現われている。  
児童数は昨年の三倍に増え、指導に苦労するものの、子  
ども達のふるさと意識の高揚に寄与できていると考える。

また、地区住民への披露、継承活動を通じて、体力、

気力づくりができるとともに郷土愛が培われた。さら  
に会員相互及び地区全体の意識の高揚、むらづくりに  
対する取り組みの強化が図られつつある。



徳光苑での棒おどり披露



徳光苑でのレクレーション

テーマ 「山川石と私たちの生活のかかわり」

少年団の構成 小学生四一名

山川小学校三年

今村 繼和・木下 俊輝・阪元 慎矢  
篠原 知仁・高橋 慶之・平田 守  
外蘭 拡・松下 竜介・松本 秀和

三福 英敬・東 沙登美・内蘭 雅美

坂本 寿美・篠原真奈美・新村さおり

中釜佳奈子・浜村 直子・藤元 真美

松上 純子・松元 愛・有馬 直輝

今村 圭佑・折田 憲吾・篠原 寛法

嶽 竜二・濱村 幸輝・東 彰悟

菱田 明浩・外蘭 寿幸・松木 大地

室屋 浩介・大蘭じおり・川畑 愛

川畑 直子・櫻井 美咲・中間やよい

西 直海・西 美和子・藤坂麻衣子

前村 知江・佐々木まどか

指導者 中釜英彦

(会社員、学級PTA委員長)

岩崎俊行

(区長、山川町郷土史研究会)

戸子田 貢

(PTA副会長、子ども会育成者代表)

尾方洋一郎

(山川小学校教諭)

柚木 宏

(山川小学校教諭)

上窪律子

(山川小学校教諭)

## 活動要旨

### 一、実施期間

平成三年四月一日～平成四年三月三十日

### 二、はじめに

山川小学校は、一〇三年の長い歴史と伝統をもつ学校です。以前は、町の中にありましたが、二十三年前に縁の多い高台に移りました。

#### (一) 地域の特色

学校のすぐ近くに山川石を切り出しているところがあります。校区の平ん山や竹山あたりです。切り出している岩石の名前は溶結凝灰岩というのです。とくに学校のすぐ近くの平ん山の山川石は、大変石の質がよいそうです。石はだが黄色いのですぐわかります。黄色いのは、酸化鉄が入っているからです。

山川石は、およそ三万年前の火山のばく発のとき出てきた物だということです。火や熱に強く、土ぐらのかべや石べいにも使われていたようです。

#### (二) 活動のねらい

ア、山川石は、町の中によく見かけられます。まず、町役場の石べいが山川石でできています。昔からお役所のあつたところです。また、かつお節屋さんの石べい

や、天神様の石段にも山川石が使われています。ほかにも置き物や記念碑、家をたてるときの土台石につかわれているのを調べてみたいと考えています。

イ、山川町は、山川港を中心に開けた町です。今から四〇年～五〇〇年の昔、日本から中国へ「おぼう様」が勉強のため行き来していました。山川は、「おぼう様の宿泊地」となっていました。そのおぼう様で病氣でなくなった方もいます。おとむらいのため、お墓とお寺を作りました。墓石は、全部山川石です。お寺は正龍寺といいます。この山川石で作ったお墓とお寺について話を聞きたいと思っています。

ウ、今、山川石を使って工作をする人は、山川小学校には、後馬場に住んでいらっしゃる堂蘭茂吉さん（六六才）だけです。大切な山川石の伝統を守る必要があります。

さいわい、学校の近くの「ふるさと産品」の新原さんが、この山川石をほり出して、切つていらっしゃいます。私たちは、この伝統を守るために山川石工作に挑戦しました。

#### (三) 実践活動の経緯

○四月二十六日（金）

・文化財ウォッチングの指定を受ける。

○五月九日（木）

- ・開講式と計画立案

- ・山川石についてのかん單なお話

○六月十九日（日）

- ・親子ふれ合い活動（一）

- ・「山川石を使って自分の好きな物を作ろう」で、

二時間の工作をする。

- ・講師は、ふるさと産品の室屋さん。

○七月十一日（木）

- ・今までの活動の様子についての報告

- ・山川石についてのお話（堂蘭さん）

○八月二十五日（日）

- （堂蘭さんは石工として活動された経験をもとに）

- ・親子ふれ合い活動（二）

・「家に持ち帰って作りかけの山川石を仕上げにかかる

ろう」

○八月二十七日（火）

- ・親子ふれ合い活動（三）

- ・二十五日の分を完全に仕上げる作業

○十月十六日（水）

- ・山川石の歴史探訪の計画を立ててみよう。

- ・審査会のため作品を持ちよる

○十月三十一日（木）

- ・山川石工作の審査会

（審査員　五名）

○十一月十六日～十八日（土・日・月）

- ・山川町文化祭へ出品展示

- ・表彰式

○一月十八日（土）

- ・「山川石の歴史探訪」

- ・講師　山川小学校尾方教頭

三、実践活動の概要

親子ふれ合い活動と山川石の保存を中心に行なった。

（一）親子で山川石を使って、自分の好きな物を作ろう

・石集めと運び方

まず、五月九日に計画会をしました。重くて、大きい

石もあるので、お父さんたちの力もかりました。

日曜参観の前の日、私たち全員で近くのふるさと産品の社長さんのところで、山川石をいただきました。社長さんは、笑顔で「大きな、よい石を持っていきなさい。たくさん持つていきなさいよ」とやさしく声をかけてくださいました。

私たちは、一輪車とりやかーで運びました。重たいの

でこうたいで運びました。

#### ● 形作りとほり方

講師の室屋先生の教えで、自分の作りたいものの形を作ります。みんな下絵を用意しました。

いろいろな形があ

りました。かえる・うさぎ・馬・犬・ねこ・魚など動物が多  
いようでした。

たくさん運んでき

た石の中から、自分の作る物にあう石を見つけます。大きい石は、おじさんやお父さんたちが、電気カッターで切ってくれます。

いよいよ「のみ・金づち」で、少しづつけります。

夏休みのあつい日もがんばりました。できた物を見たら、すぐできると思いましたが、大変苦心しました。とくに小さな部分になる手や足・頭や顔・からだのつり合いなど、けずつていくと中でこわれかけたり、ひびがは



山川石

▲頭、からだ、手足を作る。



(かえるの  
ほり方)

▶大きくなどをとる。



いつたり、おれてしまつたこともあります。

#### ● 山川石から学んだこと

山川石は、ふつうの石より軽く、持ち運びがやさしい。年月がたつと固くなつていくので、海岸にある山川の町ではしお風や火災にも強いことがわかつた。

多くの人々は、山川石を大変よろこび、自分の土地へ持つて帰つて、墓石や置き物、仏ぞう・石べいや石がき

・記念碑、また家の土台石にしたように、たくさん利用がされていたこと。



● 山川石工作の審査と展示会

審査の先生か

ら、山川石の工

作では、

① 石のえらび方

を工夫する。

② 石をじっと見

つめなさい。

・いろいろな

角度から見

ると形がわ

かる。

・まわしてみ

ると何かに

見える。

● でき上がった作品が下の写真です。



揖宿地区「文化財ウォッチング」活動発表

・見えた形をイメ

ージ化しな

さい。

・動きや立体感

を出しなさい。

・連想遊びを楽

しむ。

③ 新しいわざを学

んでいく。

などが大切である

ことを教えてもら

いました。

審査の結果は、

金賞十五、銀賞二

十五でした。作品は、校内の学習発表会と山川町文化祭にも出品して、おほめの言葉をもらいました。

□ 山川の町の歴史と山川石

山川町役場の石へいは、山川石でできています。また、かつお節や黒砂糖のぼうえきでお金持ちになつた河野家のあつたあとも石べいが残っています。

次に、山川小学校の登り口には墓地があります。この墓地は、旧正龍寺があつたところです。十年前に町の教

育委員会できれ  
いにしてください  
ました。

旧正龍寺あと

には、山川石で  
できた墓石がた  
くさんあります。

旧正龍寺跡墓石群



いろいろな戦いがありましたが、正龍寺は、特別なお  
寺であつたし、中国とのぼうえきを行なう上で大切にされ  
ました。正龍寺は、お寺を開いて四百八十年の間、文化・  
教育・ぼうえきに大切な役わりをしてきました。

#### 四、まとめと今後の

##### 課題

伝統を守るため、  
山川石にむかって  
こつこつ努力しま  
した。がんばれば

すばらしい作品が  
できることがわか  
りました。また、

作品を作るときは、  
きびしさにたえな  
くてはならないこ  
とも知りました。

●教頭先生のお  
話から  
山川石を使つ  
て墓石を作る石  
工を「ハカイシキイ」とい、戦争前には七けんありま  
した。戦争が終ると五けんになり、今では一けんです。

後馬場の堂南茂吉さん一人で山川石の伝統を守つていま  
す。

正龍寺は、京都のおぼう様であつた虎森和尚が開かれ  
たのだそうです。山川の人々は、昔からこのお寺のおぼ  
う様から学問を学んだそうです。



県教委より表彰を受ける

（一）思つたよりやわらかくて、工作がしやすいこと。  
（二）山川石には歴史があり、山川の町を作つてくれたこ  
と。

まとめでみます。

(二) 山川石をいただいたことに感しやする心を持ったこと。

四 親と子で一しょに汗を流したこと。

(五) 山川のことをよく見ることができ、知ることができたこと。

残った問題は次のことです。

- 山川石の伝統を守つてくださる人がいらつしやらなうこと。

- 国工の時間にも、もつと自然の山川石を使うとよい。
- 文化財になつてゐる正龍寺などのそうじをするボランティア活動すること。

### 五、指導者の所見

いまや学校・教室という枠の中で教育を論じ、嘗む時ではない。山川の子どもの心と体を鍛えるのに適した教育資源である。

また、「心と体」の教育の場、「厳しい試練」を生きぬく原点をさぐり、ものを創り、人としてたくましく育つことができると考えた。

硬い石のイメージを打破し、山川石の自然のすばらしさが理解されてきたこと。また、彫刻することで全てに耐性が身についてきつつある。



## テーマ「伝統芸能『剣舞』の伝承活動」

少年団の構成 小学生一八名 中学生二名

大成小学校一年 蔵蘭 麻美・前村友里江・中村 茜

二年

井上真由美

三年

掘内かすみ・福里 美穂・藏蘭あゆみ

吉村くみ子

四年

廣田 周子・福里 彩香・田中 志穂

五年

福崎 由紀・永田 典子・吉村 美香

六年

水流 詩織・水流 真子

七年

水流みどり・水流 涼子

山川中学校一年

福ヶ迫 舞

八年

藏蘭 綾香

指導者

秋元 ヨシ（神方剣舞保存会指導者）

水流 ケサ（神方剣舞保存会指導者）

水流 重隆（神方剣舞保存会指導者）

水流 美千代（神方剣舞保存会指導者）

水流 美紀子（神方剣舞保存会指導者）

福里 安清（神方子供会役員）

岩下早百合（神方子供会役員）



県優秀団体の表彰を受けた神方文化財少年団

## 活動要旨

一、実施期間 平成四年四月一日～平成五年三月三十一日  
二、はじめに

山川町は、薩摩半島の最南端鹿児島湾口に位置し、霧島火山脈が町内を縱断している為、温泉が豊富で、気候は暖流の影響で年間平均一八・五度と高く、亜熱帶的気象条件となっています。人口は一二、三〇〇人、私達の住んでいる成川区は、人口三、〇二〇人で、町の中心に位置し、その中で神方集落は、世帯数九十三戸、人口二百五十九人、子供会の参加数、中学生十二名、小学生二十四名となつていて、全員が子供会に参加しています。

今回文化財ウォッキング事業で、伝統芸能「剣舞」の传承活動をテーマに取り組みました。

すでに「剣舞」については、昭和五十六年に老人と婦人とのふれあい事業で取り組み、それをすぐ子供会に伝承して現在に至っています。

神方剣舞の起りは、大正時代、兵庫県内の紡績工場に就職した成川出身の女工さん達が工場内で習得した剣舞を、帰郷後集落内に広め、大正から昭和の初めまで成川全城のいろいろな行事や祝い事で広く踊られていました。終

戦後すたれていたものを神方集落で復活し、集落民の親睦融和を図る事を目的に今後長く剣舞を保存するよう、老人会から婦人会へ、婦人会から子供会へと踊り継がれました。

### 三、実践した活動の概要

(一) 四月十八日(土) 午後二時、神方の集会所に、子供会員及び指導者と、神方剣舞保存会員及び指導者が集まり、年間活動計画の作成が行なわれた。子供会と神方剣舞保存会は、長年の交流で親しみがあり、ここで新生一年生が紹介されます。

### (二) 五月十六日

(上) 午後二時、神方の集会所にて、「剣舞」の練習が開始される。

剣舞の踊り手は、子供会の女子のみ。



剣舞の練習風景

南方神社六月灯に披露する為、新一年生に剣舞を指導する。保存会の秋元ヨシさんは、八十八才の米寿を迎えたが、約五分間にわたる歌詞を一人で歌わわれました。

(二) 六月二十日（土）「剣舞」練習及び今後の発表計画について、保存会と子供会の打合せを行なう。

練習日を六月二十九日より毎日とする。

(四) 七月二十七日（月）南方神社六月灯に参加し、剣舞を披露する。

(五) 初めてのステージで皆緊張した様子だったが、歌に合せてうまく踊れたので、指導者に喜こんでもらえた。成川区や集落の方々に沢山のお花をいただいて、子供会と保存会で反省会を開いた。

(六)

八月六日（木）成川遺跡、神方遺跡の説明と発掘された遺跡の見学をし、老人会長さんより昔の人々の生活の様子や文化財を受け継いでいく事の大切さを学んだ。

(七) 八月二十二日（土）から八月二十四日（月）鹿児島県立南薩少年自然の家で開催された「世代間交流フェスティバル」に参加、世代間サミット、全体会、分科会では、

(八) 九月十五日（火）成川地区敬老会で剣舞を披露し、昔を思い出したと、歌を一緒に口ずさみながら喜こんで観てもらいました。

(九) 十一月十四日（土）第一回山川町生涯学習振興大会のオープニングで剣舞を披露し、事例発表と研究協議で「剣舞を踊って」の活動状況を発表しました。又、充実した子供会活動に対し評価を受け、表彰されました。

(十) 十一月十五日（日）山川町文化祭と同時に開催の推宿地区芸術祭で郷土芸能の部として、剣舞披露しました。



神方遺跡の見学

午後から、伊集院で開かれた、平成四年度県民文化祭

未来を創る文化財ウォッチング事業文化財フォーラムに参加し、剣舞を披露し、意見交換会では、練習の様子やがんばった事等を発表しました。

(+) 十二月十八日（金）大成小学校の学習発表会で、校長先生が、全校生徒と父兄に神方子供会の活動成果の紹介をして下さって、剣舞を披露しました。

#### 四 まとめと今後の課題

生涯学習振興大会風景

て、恒例となつた神方子供会主催のフルマラソンが行なわれた。コースは、集落内を代わる代わる走つてタスキを渡すもの。四歳の子供から七十二歳の高令者まで六十人が参加しました。四十二・一九五キロを約一時間五十分で完走し、剣舞保存会の指導者の方々よりぜんざいがふるまわれました。

神方子供会の剣舞は、私達の先輩が受け継いで十年以



世代間交流フェスティバル



生涯学習振興大会風景



「剣舞を踊って」の発表

になります。伴奏のない唄で力強く踊るのはとてもむづかしく、一年生の時は、上級生のお姉さん達に一生懸命教えてもらいました。保存会の人達から厳しく指導を受け歌詞を覚えたら、絶対忘れないのです。練習日には、友達の家を呼んで回りました。皆と仲良くできてとても良かったと思います。

これからも、お年よりやお母さんお姉さん達と仲良く踊れる神方剣舞を大切に守っていきたいと思います。

##### 五、指導者の所見

子供達にとって剣舞を覚える事は大きな自信であり、集落民としての誇りであるようです。恥かしがらず堂々と舞い、これからも明るく素直な子供達であつてほしいと思います。



県文化財フォーラムでの活動発表



県優秀団体の表彰を受ける

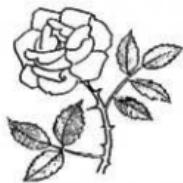


県文化財フォーラムでの剣舞発表

導員の後継者を育てたり、子供達も少なくなるので、  
子にも舞を教えていく事になるでしょう。  
男



みんなでつないだ42.195キロ



## テーマ「利永の文化財の保護とその伝承」

少年団の構成 小学生一九名 中学生六名

利永小学校一年 和田かおり

二年 西尾 望

三年 桃木 博人・西元 一孝・和田 和子

阿間見 孝・星隈 夏季・和田迫大地

四年 西尾 清広・松山 智子・西元 郁美

川迫 侑貴

五年 西尾 萨・阿間見寿代・星隈 大季

和田迫翔太・高良 晃

六年 川迫 秋博・南迫 博和

山川中学校一年 南迫 加代・高良 知子・阿間見 良

一年 中村 幹雄・迫田 美晴・松山久美子

指導者 星隈 幸子(農業)  
高良 和子(無職)

西尾かえみ(無職)



琉球人傘踊り

## 活動要旨

としての自覚を高めていきたい。そのため、次のような活動のねらいを定めている。

一、実施期間 平成五年四月一日～平成六年三月三十一日

### 二、はじめに

本少年団は、特別に設置したものでなく、子供会活動の中で文化財探訪や郷土芸能の伝承活動を統けている東下子供会をそのまま少年団として活動しているものである。

#### (一) 地域の特性

本地区は、山川町の西部に位置し、池田湖の南に広がる田園地帯である。人口は約一六〇〇人で専業農家が大半を占めている。

江戸時代の頃から今和泉村に属しており、戦後になつて利永村として分村している。現在の山川町に合併したのは昭和三十年であり歴史的にも独立志向の強い地域性をもつている。幾多の郷土行事がそのまま残っている。なかでも「メンドン」や「ダセチツ」は、特異な行事として広報されている。また、郷土芸能の「琉球人傘踊り」は、当地区の保存会が、子供たちに伝承していく意義あるものである。

#### (二) 活動のねらい

本地区にある伝統的な行事や郷土芸能を生かした村づくりの一環として、子供たちにも積極的に参加させ、地区民

○郷土に残るさまざまな行事に積極的に参加させ、共に行事を守り育てていこうとする態度を養う。

○郷土芸能を自ら進んで体得し、後世にも伝承していくことをする態度と技能を育てていく。

### 三、実践活動の概要

本少年団は、ねらいにもあるように、さまざまな活動を通して実践してきている。その中で、二つの事例を報告したい。

#### (一) 文化財探訪

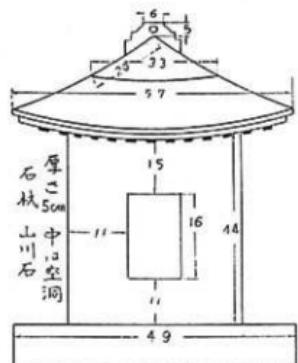
八月二十一日(土)午後二時、地区公民館に団員のすべてが集まつた。今日は、郷土史家の南清孝先生を講師にして、郷土にある文化財を探ねである予定である。子供たちは、ノートを手に今か今かと待つていた。南先生の紹介があり、さっそく活動が始まった。以下、当日の日程に従つて述べていく。

#### ア、公民館で

大きな利永の地図を前に、先生の話が始まつた。にこに

- こしながら、先生は利永の歴史と利永弁について話され、史跡については、現地に行って説明することにされた。利永の歴史についての説明の概要是次のようなものであった。
- 利永からは、古墳時代の土器が出土している。かなり古いところから人々が住みついたところである。(ドンキド)
  - 利永はいつも水害になやまされていたが池田湖に水を流すためトンネルを掘った。そのため水害はなくなった。
- (ヌッドン)
- 利永は、今和泉村の利永郷であつたり、頤姥郷に含まれたり、独立して利永村となつたりしているので、町内の地区と異なる行事や言葉が残っている。
- 大火事に見舞われ、地区の形が大きく変つたり、子供会の「火の用心」活動が始まった。
  - イ、ヌッドンを見て
- 公民館から池田湖側の山手にあるヌッドンの水神「ヌッドンサア」を見に出かけた。
- ヌッドンの「ヌッ」は「ヌキ」であり、トンネルという意味である。用水トンネルを掘った藤田勝右衛門の業績をたたえて建てられた水神様をヌッドンと言うようになったそうである。トンネルのあとは今も残っているが草やぶと、くずれる危険もあつて見ることはできなかつた。子供たちは次のような感想を述べていた。

工、利永のことばについて  
利永のことばが山川町の各地区と違うのは、今和泉やは



記念碑正面図

- こんなところから池田湖まで、よくトンネルが掘れたものだ。
  - 道具（機械）もない時代なので、大変な苦労をしたことだろう。
  - 今の利永の様子からは、水害は考えることができない。  
(利永には川がない)
  - ウ、ドンキドに行つて
- 古墳時代の遺跡が出たドンキドと呼ばれるところに行つた。出てきた土器は、町民会館にあるそだ。成川遺跡と同じころだという。土器が出たというだけだったせいか、子供たちは、あまり興味を示さなかつた。

がでていったということだった。子供たちは、今はほとんど使われていないことばだったので、なかなか理解できなかつたようだ。

オ、探訪を終えて

子供たちと自分の地区内をあちこち歩いてみて、自分たちも知らないことが多くて勉強させられた。また、利永弁ということばがあることさえも知らなかつた。改めて聞くと祖母たちの使っていることばの中に、思い出すものもあって、歴史とのつながりを深く思うことであつた。

□ 利永琉球人拿踊りの伝承

毎年九月末から十月の初めまで、利永小学校の体育館で、琉球人拿踊りの練習がおこなわれる。地区内にある保存会のみなさんが、子供たちに郷土芸能の伝承をしていく恒例の行事である。練習の成果は、校区の運動会で披露されることになつてゐる。

ア、活動の日程

(ア) 九月二十日 打ち合せ会

利永公民館に、保存会員全員と保護者・学校関係者が集まつて、練習日程等の打ち合せ会をおこなつた。

(イ) 九月二十三日 練習初日

夜七時、子供たち全員を集め、保存会の人の話を聞く。

○ 薩摩藩に送られた琉球の使節が山川港に入港後、

開聞神社に参詣していたが、その行列が利永を通つていた。その行列の様子を踊りにしたものである。  
その後、VTRを視聴した。

(ウ) 九月二十四日 練習開始

- 役割分担、行列の位置決定

- 歌の練習と模範演技

- 分組に沿つて練習

いよいよ練習が始まつた。拿三人、小太鼓三人、鉦二人、扇三人、笛その他全員に分かれ、担当の大人がついて子供たちに教えていた。子供たちも必死に習つてゐるが変化についていけない状況であつた。

(エ) 十月一日、練習中盤

「拿踊り」はよく覚えてきたが、「かれよし」の踊りがつづ立つたままだと、保存会の人から指導される。子供たちは練習にかける意気込みがあり、何度も注意を受けてもくじける様子はない。

(オ) 十月八日 練習終わり

およそ二週間にわたり毎晩つづけてきた練習も今日で終わり。すっかり身につけてきた一連の踊りを通して仕上げとした。

その後、衣装合わせと、化粧のしかたを保護者が保存会の人の手ほどきを受けながら練習した。自分の子供の

化粧と衣装は、保護者が責任をもつことになっている。

子供たちは練習期間中の努力をほめられ、ほうびのおやつをいただいた。

(カ) 十月十日、踊りの公開

いよいよ、校区の運動会当日となつた。昼休み、理科室で衣装を着、顔化粧を始めた。子供たちが見ちがえるようになつた。

午後の一一番、「利永琉球人傘踊り」がアナウンスされ、

子供たちが入場していく。踊りは期待以上によくでき、校区の方々の大きな拍手の中で引き上げてきた。自分たちも郷土芸能の伝承者となりえた喜びに満ちあふれていた。



利永小運動会で踊りの公開

ヨンとして、この踊りを披露してくれた。

四、まとめと今後の課題

郷土に残る史跡や言葉を調べたり、郷土芸能を伝承したりする活動が計画どおり実施できた。子供たちも興味をもつて臨んでくれ、自分たちの郷土に対する愛着心が育つったと思われる。

今後は、「月にある「メンドン」への参加と、「ダセチツ」への取り組みが残っているので、今の気持ちでがんばっていただきたい。課題として考えるのは、中学生の参加である。活動が小学生を中心であり、部活の関係で充分な参加ができるない。中・高校生を混えた活動を考えていきたい。

五、指導者の所見

子供たちとともに文化財を探ねたり、昔の利永のことを知るにつけ、自分たちも学ぶことの大切さを感じました。子供たちもこの活動で、ふるさと利永を思い出すきっかけをつかんだのは思っています。親子ともどもよい勉強だつたと感謝しています。

中学校三年生全員  
が、県PTA研究  
大会のアトラクシ

## 編集後記

文化財少年団の活動成果を、いつかはまとめたい。そうすることによって、必ずや、子どもたちが、ふるさと山川をみつめなおす資料になるにちがいない。

なぜなら、文化財少年団の活動は大人の指導があるとはいえ、子どもたち自らの活動の軌跡ゆえに、他の子どもたちの心をうつにちがいないからである。どの子も、本当によく頑張った。

いま、こうして、成果集を発刊する。指導にあたつてくださった方々、応援してくださった方々、またこの活動を遂行するために熱心にお世話くださった方々に、心から感謝の意をあらわしたい。

望むらくは、この小冊誌が、子どもたちだけでなく、広く一般成人にも活用されることを。

(松)

平成六年三月十七日







